

人々が安全で豊かな生活を送れる未来創りに挑み続ける

オートケミカル 株式会社



創業以来、“技術と品質のパイオニア”を目指し、キャストイングウレタン樹脂を原料とした工業製品を、鉄鋼業界をはじめ、多くの産業分野に提供してきたオートケミカル(株)。社是の“未来に挑め、今、その時”とあるように、世の中の変化に柔軟に対応し、常に新しいものに挑戦し続けている。今回は、代表取締役社長の合田研吾氏に創業の歴史から専門メーカーである強み、そして将来の展望について伺いました。

一 創業の歴史 ～特品部からの独立～

当社は1971年(昭和46年)3月に現会長の合田房雄がオートタイヤ(株)(現:住友ゴム工業(株))の特品部からウレタンゴム工業用部門を分離、独立して大阪事務所を開設。同年8月、香川県豊浜町に本社工場完成と同時にオートケミカル(株)を設立しました。

1960年代後半から70年代前半まで、大手企業は自動車用タイヤに代わる素材として耐荷重性、耐摩耗性に優れたウレタンに注目し、研究開発を続けていました。しかし、現在、自動車用タイヤとしてウレタンタイヤが市場に出回っていないことからわかるように、実用化には至りませんでした。高熱、高速回転に耐えることができなかつたためです。オートタイヤ(株)も実現に至らず、止むなくウレタンタイヤの開発から撤退しました。

しかし、このウレタンは自動車用タイヤには使えませんでした、フォークリフトやジェットコースターなどの産

業用/遊戯用車輪や業務用ローラーなど、使用環境を考慮すれば大変優れた素材であると合田房雄は考え、ウレタンの研究開発をひたむきに続けました。研究の甲斐あって、産業用/遊戯用にウレタンを利用することができ、今では当社の主力製品の一つです。

一 国内の事業所拡大 ～お客様に喜ばれる製品の提供～

創業当初の仕事はオートタイヤ(株)からの仕事を行っていました。そのため、当社製品の商標はオートタイヤ(株)から譲り受けたものです。主な製品は繊維関係(毛布、タオルなど)に使用する業務用ローラーの製造でした。

創業後の10年間は右肩上がりに売り上げをのばしていきました。それは、ウレタンが工業用部品の材料として注目され始めていたからです。途中、オイルショックもありましたが、幸いなことに当社はほとんど影響を受けることはありませんでした。

創業当初は四国と大阪の2拠点でし

オートケミカル 株式会社

代表取締役社長: 合田 研吾 氏
本社: 大阪府高石市取石5丁目9番1号
設立: 1971年(昭和46年)8月10日
社員数: 137名

事業内容: ウレタンゴムによる
各種工業用品の製造販売
工業用ゴム製品、
プラスチック製品の販売



身近なところで使われている同社の製品 耐震マットの“マイティータック”

同社の製品は身近なところでも使用されています。マイティータックは、地震対策用の製品であり、OA機器・家電・家具などの底面に貼り、耐震・防振・転倒防止対策として使用され、震度7相当の地震にも対応できる粘着性を持っています。



■先進の設備機器を導入した研究開発部門

設立23年の部門。先進の設備機器を導入し、新しい技術と未来の素材開発に挑んでいる。開発の他に、工場のコストダウン、営業の支援も行う。ここから同社独自の「Mighty-Prene(マイティープレーン)」の製品化に至る。ウレタンゴムのリーディングカンパニーとして、応用分野を広く深く開拓している。



■エコロジーとエコノミー

環境への取り組みのためにウレタンの廃材をリサイクルし、再利用しています。当社の廃材は除雪車の刃先に使用しています。弾性体のため路面を傷付けず、耐磨耗性が良いためスムーズな除雪作業が行えます。

たが、1980年頃から全国に営業所・工場の開設を始めました。事業所を各地に展開した一番の要因はお客様に対して即時にレスポンスをするためです。

お客様からの問い合わせに対する回答が遅れたり、納品が遅れるということはあってはならないことです。そこで、主要なお客様へのアクセスが良いところに営業所・工場を構えました。



(株)タンデム和泉工場

— 当社の最大の強み

～数少ないウレタン専門メーカー～

当社は日本では数少ないウレタンの専門メーカーであり、専門メーカーならではの強みを持っています。

まず1つ目は、他社では扱っていないウレタン材料を取り扱うことができることです。一般的なゴムメーカーは、天然ゴム・合成ゴム・EPMなどのゴム材料を中心に扱っており、その一部としてウレタンゴムを取り扱っています。しかし、当社はウレタンが主体の専門メーカーであるため、一般的なゴムメーカーでは扱っていないような特殊なウレタン材料も多数取り扱っています。そのため、お客様の細かい要求にも対

応することができるのだと思います。

2つ目は、大型製品の製造です。主に四国工場と鹿島工場で生産している鉄鋼用のロールは、大きいもので幅1,800mm、長さは6,000mmにおよびます。こうした大型製品は専用の設備がなければ製造することはできません。また、設備があっても大型製品を造るにはかなりのノウハウが必要です。中心部までムラなく硬化させるにはどうすれば良いのか、材料の調合や温度の設定など、これまでウレタン一筋で研究・開発をしてきた当社だからできるものと自負しております。

3つ目は、ウレタンを専門とした研究開発部門があることです。現在は6名が従事しています。高品質な製品を提供するため、先進の設備機器を導入し、ウレタンに関する製造技術や、新しい素材の開発に取り組んでいます。お客様の細かい要求に応えられるように、また、様々な分野へも応用できるように日々研究開発を続けています。

— 将来のビジョン

将来、日本の市場は確実に減少します。市場の競争を勝ち抜くために、私は3つの目標をもって経営にあたっています。

1つ目は、ウレタンで勝ち残っていくことです。そのためには国内の競合メ

ーカーに勝たなければいけません。ウレタンで、どの製品、どの分野でも勝つことができれば良いのですが、時には取捨選択をしなければいけません。ここだけは負けないという明確な強みを持つことが大切ではないでしょうか。

2つ目は、今の技術を活かせる用途展開です。今はウレタン以外の材料を使っているが、ウレタンを使えばもっと性能が良くなるものも多くあります。当社ではそういった分野を開拓し、展開していきたいと考えています。

3つ目は、海外市場の開拓です。ひと昔前は大手企業と一緒に海外進出する企業が多くありましたが、その企業頼みになってしまっただけで大きなリスクになります。そのため、困難ではありますが、独自の販路開拓が必要です。今は東南アジアが急成長しています。文化は違いますが、需要は必ずあるはずで、日本で培った技術は海外でも必ず使えます。そこを活かして進出していきたいと考えています。

当社はお客様に「使ってよかった」と、喜ばれるような製品づくりに取り組み、社会に貢献していきたいと考えています。お客様にとっての価値を高めながら、品質、環境に配慮しながら製造を続けてまいります。

— 貴重なお話をいただき

誠にありがとうございました。